

自己評価とメタ認知ストラテジー：留学生面接調査の結果分析から

著者	富阪 容子
雑誌名	言語と文化
巻	11
ページ	139-151
発行年	2007-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000451

自己評価とメタ認知ストラテジー

——留学生面接調査の結果分析から——

富 阪 容 子

1. はじめに

甲南大学日本語プログラムに参加する留学生は9月に来日し、秋学期（9～12月）と春学期（1～5月）の2学期間にわたってホームステイをしながら日本語と日本文化に関する単位を取得する。同プログラムの特徴は、少人数制であること、チームティーチングが行われていること、授業以外に個別学習指導を受ける機会が開かれていること等が挙げられる。この個別学習指導のための時間を利用して「日本語上達に関する自己評価調査」を実施した。同調査の目的は学習者自身が自己の日本語上達の軌跡をどのように把握しているのかを知ること、教室以外で得られる学習の機会がどのように有効利用されているかを探ることである。2004年度及び2005年度の約70名の学習者¹⁾を対象に実施した聞き取り調査によって得られた結果とその分析結果を紹介したい。本稿は筆者を含む3名の担当者²⁾による教育実践報告であると同時に、共同研究の一部を示すものである。

留学を始めたばかりの秋学期においては、程度の差こそあれすべての学習者の言語能力が向上する。来日当初は新しい生活環境に入るためのストレス、学習環境の相違から生じる問題、カルチュラル・ファティーグ等の問題に遭遇するが、それらを乗り越えて一定の学習成果を挙げることができる。教室内で学習した内容を実際に言語が使用されている教室外環境で試すこと、逆に教室外環境の中で体感した課題を教室内に持ち帰って解決するという相互作用によって上達が促されるからである。しかし、留学生活に慣れた春学期においては、学習者によって成否が分かれる可能性が大きい。本来なら社会言語的能力も加わり日本語運用能力が花開く時期であると見られる春学期において、上達スピードが低下したり停滞したりするケースが多々見られるのは残念なことである。このような一部の学習者の否定的な気分がグループ全体に悪影響を及ぼすことがある。そんな現状を打破するために有効な方策を発見したいというのが2004年度から面接調査を開始したきっかけとなっている。

留学終了直前に行われる本調査は、学習者にとっては留学の全期間にわたる学習過程を振り返って内省する機会を得るという利点がある。自己評価にかかわるメタ認知ストラテジーを活性化する機能を果たすものと思われる。同時に、面接調査にあたる教師はそこから得られたデータを詳細に分析することによって学習者支援のためのヒントを得ることができる。本調査を毎年、継続していけば今後の教室活動のあり方やカリキュラム編成を見直すために役立つ情報を入手することが可能となり、第二言語学習の指導上で生かすべき方法論

を構築できるものと期待している。

2. 面接調査の実施方法

学習者が同調査に協力するかどうかは本人の自由意志で決定されるが、面接調査を行う主旨や目的を説明することによって全員からの調査協力を得ている。自己の学習過程を振り返るという教育上効果も期待されるために、全員参加が望ましいと考えられる。調査のための調査ではなく学習者とのコミュニケーションをはかるために重要な意義を持つ機会であると考え、これを第一義としている。留学期間中の言語習得の経験及びその心理状態に関しての学習者自身の語りを聞き取ることを目指している。3名の面接者が収集したデータを蓄積して共有できるものとするために、共通の質問項目が書き込まれた用紙を準備して聞き取り調査を行うことにしている。面接者は一連の共通質問を投げかけながら、その対話の中で生じた話題を更に広げたり、追跡的質問を行って内容を深めたりし質の高いデータを収集できるように柔軟に対応している。全体の質問事項とその構成や手順はほぼ決まっているが、より深く話題を追求する部分がオープン形式をとる半構造化面接³⁾である。リラックスした環境下で行われることを重視するために録音、録画機器は使用しないが、メモをとりながらできるだけ正確に詳細な情報を記録することに努めている。面接調査は以下に示されるように計2回実施されるが、本稿では留学終了直前に行われる第2回面接に関する調査結果に焦点を当てて分析を行いたい。第1回面接で収集されたデータと第2回面接で得られるデータとの異なりに注目した分析も興味深いが、本稿では取り扱わないことにする。

表1 面接調査の実施方式

面接者	3名（日本語授業担当者）
調査対象者	日本語コースの受講生
所要時間	1人につき約30分
使用言語	目標言語を原則とする。
面接方法	一対一の対面方式。半構造化面接。 面接調査票を用いて聞き取り内容を書き込む。
実施時期	第1回面接 留学開始後約1ヶ月 第2回面接 留学終了前約1ヶ月
調査内容	第1回面接 ① 日本語クラス適応の有無 ② ホームステイ先での言語使用 第2回面接 ① 日本語能力向上に関する自己評価 ② 能力向上を促した要因分析

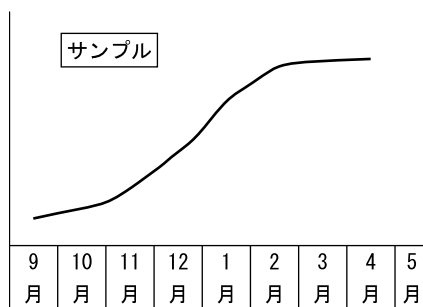
被面接者にとって、面接者は日本語授業担当者であり日本語コースの成績評価者である。コースの成績を左右する教師である面接者に向かってどこまで本音が語れるのかという危機

もないわけではない。使用言語は目標言語である日本語なので、外国語でどこまで自分の気持ちを詳細に語れるのだろうかという疑問もある。しかし、平常授業を中心とする場面における詳細な参与観察が進められる上に、被面接者との信頼関係を構築しやすい点がメリットとなる。話そうと努力すれば心の内を理解してもらえするという信頼関係があれば、情緒面、感情面に関する語りを含んだ優れた質的データが得られる可能性が高いだろう。

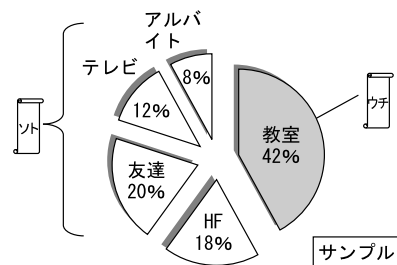
3. 調査結果

面接調査にあたっては次のグラフ1、グラフ2にサンプルとして示した線グラフと円グラフを作成するように求めた。グラフ1の横軸は時系列で、縦軸は上達度を示すものである。グラフ2は言語能力向上に役立ったのはどんな要因であるか、それぞれの要因はどのような割合を占めているかを示したものである。

グラフ1 日本語上達に関する主観的評価曲線



グラフ2 言語学習に役立ったリソースの内訳



3-1 日本語上達に関する主観的評価曲線

グラフ1では横軸には留学生活が始まった9月からの時間を区切り、時系列上で学習者自身に自分の日本語能力がどのように変化していったかを線で表すことを求めた。縦軸に目盛りがないのは学習者個人の主観で日本語能力の上下を自由に描くように求めたからである。客観的尺度ではないために、教師の参与観察の結果とはるかに異なる線が描かれることがある。2004年度は被面接者41名のうちで上達グラフに関する有効回答は34名分であるが、2005年度は被面接者32名のすべてから有効回答が得られた。面接を受ける者にとって自己の学習体験をいかに評価して位置づけるか、それを他者にいかに正確に伝達するかは容易な作業ではない。調査協力の姿勢を見せながら、自己を語ることに失敗する者がある。自己の学習を観察する能力が不足しているために留学期間中の上達度に関して正しく自己評価を行うことができない者、評価するのは教師であると考えて上達に関する自己評価を拒否する者、心理的抵抗から積極的に表現しようとしめない者などがある。以前にも留学した経験を持つある学

習者は「前の留学が終わった時点で自分は全然上達しなかったと考えていたが、帰国後になって初めて自分がいかに上達していたかに気づいた」という意見を述べている。このように評価は流動的なものだが、留学終了を直前にした時期における自己評価で良いと見なされる。

作成された上達グラフによると、前期で急激に伸びた者、前期は伸びが感じられず後期になってから急に楽になったと感じた者、後期に学習意欲を喪失した者、上下を繰り返しながら右肩上がりに進んでいる者、階段型に上昇する者、波形に上下する者、S字型に変化する者など、さまざまな型が見られる。現在の到達度に満足しているかどうかを聞いてみると、当初の予想以上の成果を挙げられたと述べる者はごく少数に過ぎない。理想はもともと高く設定されていたからだと思われるが、現実それほど楽観的なものではなく、もっと高いレベルに達するはずだという漠然とした期待はしばしば裏切られるようである。主観的上達曲線の主なタイプ別分類を次に示す。

表2 日本語上達に関する主観的評価曲線のタイプ（単位：人）

型	タイプ別分類	2004年度 計 34	2005年度 計 32	合 計
1 型	前期後期上昇型	13	9	22 (33.3%)
2 型	わずかな上昇型	4	3	7 (10.6%)
3 型	奥伸び型	4	8	12 (18.2%)
4 型	後期高原型	8	10	18 (27.3%)
5 型	後期下降型	2	1	3 (4.5%)
そ の 他 ⁴⁾		3	1	4 (6.1%)

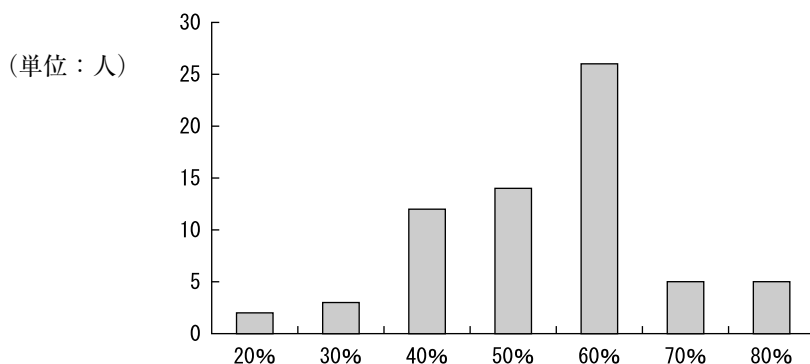
1 型「前期後期上昇型」は全期間にわたって右肩上がりに移行したと述べている者である。一直線上昇だけではなく波形や階段状に上昇しているものも含む。山や谷がありながらも、次第に上昇する傾向を示しているものはこの型に分類した。2 型「わずかな上昇型」は上昇を続けているが、そのカーブを極めて緩やかなものとしてしか表現しないタイプである。成績優秀な学習者がこの型を描くという意外なケースも見られるが、それが主観的評価たる由縁であろう。3 型「奥伸び型」は前期にはなかなか能力の伸びが感じられず苦労していたが、冬休みが終わって後期になってからは急に聞き取り力が伸びて楽になってきたと述べている者などである。1 型に次いで高い割合を占めている 4 型「後期高原型」は、前期には順調に上達しているという実感が得られたにもかかわらず後期になって上達のスピードが落ちたか停滞した者である。5 型「後期下降型」はある時期をピークにして下落傾向を示すものである。後期に問題点を持つのは主として 4 型と 5 型の学習者であるが、実は他の型のグラフを描いた者の中にも深刻な問題を抱えているケースが存在することを見落としてはならない。4 型と 5 型を合計すると全体の三分の一近くを示していることから留学後期における指導が大切であることが明らかである。格別の動機付けや学習ストラテジーに支えられなければ、多くの学習者は後期高原型に陥る可能性が高いものと思われる。留学後期に多く見られる停

滞感の原因は何なのか、どのような対策が考えられるかを次節以下で詳しく考察したい。この面接調査ではどのような型の上達曲線を描いたかという結果が重要なのではなく、描写したグラフを前にして共に語り合う協働作業の過程が大切だと考えている。

3-2 言語学習に役立ったリソース

日本語能力向上を促した要因は何であるかとの問い、つまり教室内でどれだけ学習できたか、教室外でどれだけ習得を進められたかという問いである。教室内とは教室という空間で行われる授業以外にも、その授業前後の予習や復習、宿題や語彙の勉強など教室以外の場所で行われるものも含んでいる。教室内と教室外の区別は場所の区別ではなく、コースで与えられたものであるか否かを示すものである。大多数の学習者にとって日本語コースで良い成績をとることが留学目的の一つなので、教室内学習を完全に放棄する者は見られない。次のグラフ3は教室外に依存している割合を示すものである。縦軸は人数、横軸は教室外の割合を表している。教室外から得られる割合を60%としている者の人数が最も多いことがわかる。教室外を25%とみなす者から80%とみなす者まで千差万別なので、平均値を出すことにはあまり意味がないが、教室外の割合の平均値は2004年度56.4%、2005年度55.8%であり年度による大差は見られない。

グラフ3 教室外学習の占める割合



教室外要素として何を利用しているかは学習者の個別性要因によって変化する。教室外のリソースは個々人で異なっており、一人として同じものはありえないこと、教室内外のバランスは絶えず変化を続けていることなどが明らかになっている。ここで挙げられている数値は後期終了直前の状態を示していると見られるが、教室外要素として次のような広範囲な各種の要素が挙げられている。

1. 対人的要素（母語話者との接触・双方向的・意味交渉が起きる）

ホストファミリー ホストファミリーの友人や親戚など

同大学学生（国際交流クラブや所属部の部員） 会話パートナー

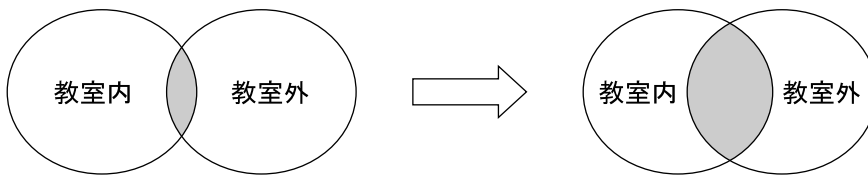
友人 恋人 お稽古ごとの先生 親戚 旧友

- アルバイト先の人 パーで出会う人 同好会や趣味の会などで会う人
 店員や駅員など 旅行中に会う人 ツアーガイド
2. 非対人的要素 (情報源や趣味) (主として一方向の情報収集)
- Eメール インターネット ゲーム アニメ コミックス
 テレビや新聞などのメディア 本 雑誌 小説 映画
 趣味の世界の情報誌 (音楽, ファッションなど)
3. 自習や独学
- 漢字学習 語彙学習 電子辞書の活用
4. 日常生活一般 (社会文化的要素を含む)

駅や車内のアナウンス 街の中の看板や標識 吊り広告 食品表示

教室内学習に加えて広範囲な教室外でのインプット並びにアウトプットの機会を得ている学習者が多い。豊かな教室外要素を活用している者は多くの収穫を得ていると考えられるが、教室内パーセントが低すぎる学習者の中には学習上の深刻な問題を抱えているケースがある。例えば「クラスレベルが適合しないので教室内活動で学べない」「学習意欲が低く、まじめに授業に取り組んでいない」という恐れもある。教室内と教室外の割合の多少から学習の成否を述べることはできない。さまざまな要因のためにどちらを多く取捨選択することになるかは各人によって異なるが、大切なことはどれだけの大きさの円を描いたか、即ちどれだけの学習成果を上げたかの総量であって、教室内と教室外の割合の多少によるものではない。ある学習者が述べるところによると、教室内要素と教室外要素は不可分なもので、教室内で習ったことを教室外で生かすからこそ、その相乗作用で学習効果が倍増するという。この学習者の場合はホストファミリーとの人間関係が良好であったので、バランスの良い習得が可能となった。これこそ留学の醍醐味と言ってもいいかもしれない。留学したからといって必ずしもこのような効果が得られるとは限らない。良い結果を生むことが可能かどうかは学習者の個性的要因に支えられているものと思われ、それを探ることが重要な課題と見なされる。以上、観察してきたように、教室外環境との接触が増えることによって日本語能力が飛躍的に上昇した者がいる一方で、その接触がうまく作用しなかった者がいる。今後の留学希望者に対してどんなアドバイスがあるかを学習者自身に聞いたところ、「自分の国で2～3年は学習してきた方がいい。その方が体験の幅が広がるから」という回答があった。全体の調査結果でも、中上級以上の学習者の方が教室外世界との接触によって実りある収穫が得られやすいという傾向が見られた。鎌田(2006)では留学生アイランド問題⁵⁾が指摘されているが、留学生アイランドから脱却するためには広範囲な教室外環境と積極的に接触する機会を求めることが解決策の一步となるであろう。教室内での学習に関して教師は継続的にモニタリングを行っているが、教室外習得に関する実態はほとんどブラックボックスのままであったが、この調査を進めることによりブラックボックス解明のための有益な情報がもたらされるだろう。以下に示されるように教室外の部分が解明されることにより、右図のよう

に相互作用の部分が豊かになる。教室内と教室外の融合をはかるための方向性を示していると考えられる。



4. 後期高原型の分析

留学全期間にわたる言語上達の軌跡の中で右肩上がりの上昇線が停止してしまうことがあるとすれば、それはどの時期なのか、その原因は何だろうか。第3節の表2の4～5型にも見られるように、後期に問題を持つ学習者が多いことが観察されるが、その停滞期が更に上の学習段階に進むための一時的停滞であれば踏むべきステップの一つと考えられる。学習者が描いた「日本語上達に関する主観的評価曲線」をもとにして、なぜその時期に停滞していると感じたかという理由を尋ねてみると、後期高原型の学習者からは次のような回答が得られた。

- ① ホームシックになった。
- ② 冬休みに帰国した。
- ③ ホストファミリーとの人間関係に悩む。
- ④ 大学のプログラムとの相性が悪い。クラスのレベルが適合しない。
- ⑤ 春学期は日本人学生がキャンパス内にいなくなって寂しく感じる。
春学期は休みが多くて気が抜ける。(入試休み, 春休み, 5月連休)
- ⑥ 休暇の時にはタイへ旅行して日本語との接触がない日を過ごした。
- ⑦ 単語だけで用をすませることに慣れて会話運用能力が停滞(低下)した。
- ⑧ あることがきっかけで反日感情を持つようになった。
- ⑨ 日本人とある程度のコミュニケーションができるようになったので、
それ以上に言語が上手になる必要性を感じなくなった。
- ⑩ ほかの留学生と時間を過ごしすぎて英語ばかり使った。
- ⑪ 帰国後は勉強を続けなかったら気がゆるんだ。
- ⑫ 帰国が近づいて遊びたくなくなってやる気がなくなった。

上記項目のうち一部は前期(秋学期)にも起こるが、大半は後期(春学期)の問題である。前期(9月～12月)は集中的に学習が進むが、前期終了後は「冬休み」「入試休み」「春休み」「5月の連休」と次々に休暇が入るために学習が中断される。また、日本人学生が1月から4月にかけてキャンパスから姿を消すために留学生アイランド問題が深刻化する。留学期間

中に何らかの悪い経験に遭遇して反日感情に陥ってしまうこともある。前期の学習によって順調な成果を収めた学習者でさえ「もうここまで伸びたから十分だろう」と思ったり「同じパターンの繰り返しに飽きた」と思ったりしがちである。また、帰国を直前にすると留学中に属していたドメイン⁶⁾からの脱却にあたって帰国前症候群とでもいうべき心理状態になる。何でもチャレンジして新しいドメインを獲得しようとしていた来日当初とは逆に、ドメインから離脱する日が近づく時期に生じる危機である。帰国するまでまだ時間が残されていても、帰国後のコースのことや人間関係のことが気にかかるようになる。

「自分の大学では4月というのは学期末であり、そのころから日本の生活に飽きてきて自国へ帰りたくなり、授業以外の自然な日本語だけでいいと思ったし、自国でのカンフーのクラブ活動が恋しくなった」と述べている。これらを総合的に考察すると、

- A 留学生アイランド問題
- B ステップアップのためのハードルを越えられない
- C 帰国前症候群

に分類されるのではないだろうか。次のように述べる学習者もいる。

「前期は一生懸命勉強した。1月ごろがピークだった。日本人学生がキャンパスに少なくなる2月から春休みにかけては英語しか使わなくなり、それに復習ばかりの教科書になったので教室内学習への意欲もなくなった。自分は怠け者という感じがする。もう終わりが近いし勉強よりも楽しいことがしたい。遊びに行くとか飲みに行くとか」

この学習者は正しく自己分析を行って心のうちを正直に打ち明けている。学習意欲が衰退し学習目標を完全に見失っているので、学力も低下していると語っている。無力感を抱いたまま留学が終わりを迎えることはこの学習者自身にとって好ましいことではないだろう。後期停滞や低下の現象をなくすために早急の解決策が望まれる。

5 メタ認知ストラテジーの活性化

前にも述べたように、強い動機付けを持っていること、高い学習目標を絶えず持ち続けることが環境のいかんにかかわらず学習に成功する原動力となる。上達の原因は何かと問われた学習者は次のように四技能別に分類して答えた。

「どこから学んだかは、その技能によって違う。話すことは友達と授業から習った。ホストの母からは関西弁を習った。聞くことはテレビから、読むことは漫画と新聞から、書くことは読んだり聞いたりして、そのスタイルをまねることによって習得した。日本へ来る前は必ず翻訳してから話したり意味を理解したりしていたが、今はそのような必要がなくなった。しかし、関西弁が話せたからといってウチに入れるわけではない」

この学習者は教室内学習ではそれほど成功したと言えなかったが、強い動機づけを持っていたので教室外で幅広いリソースを活用することができたようである。日本語コースの授業

の成績のみで学習者を判断することの弊害、個別面接によって得られる新たな発見に気づかされた。

「初めは考えないと何も話せなかったが、日本での生活のおかげで聞くことと話すことが上達した。関西弁ができるようになったのは友達のおかげで、読むことができるようになったのは授業のおかげだ。授業で習う文型は日常会話に役立つけど、単語は役に立たないので、日々の生活で必要性を感じたものをメモ帳に書きとめたものを利用している」

このような調査結果からは第二言語習得のために授業が果たすべき役割についてのヒントが得られる。前期はコミュニケーションが可能になる会話力の養成に焦点を当てるべきだが、後期の日本語授業ではむしろ読み書きに重点を置いたチャレンジングなレベルの学習をめざすべきではないかという仮説が立てられる。会話や関西弁は教室外環境から習える可能性があるが、読み書き能力は教室内活動に依存する部分が大きいからである。教室の内外を問わず、学習を成功に導く者はメタ認知ストラテジーをうまく活用していると言えよう。メタ認知ストラテジーが活性化された学習者は春学期に生じる数々のハードルにもかかわらず、自己主導型学習を継続することができると言える。学習を成功に導くためのストラテジーには種々のものが挙げられるが、最も中核に位置するものはメタ認知ストラテジーだと思われる。Oxford (1990) はCentering Your Learning, Arranging and Planning Your Learning, Evaluating Your Learning「自分の学習を正しく位置づける。自分の学習を順序立て、計画する。自分の学習をきちんと評価する」ものとしてメタ認知ストラテジーを挙げている。面接調査の際に自己内省力が欠如している学習者に会うこともしばしばあるが、一方、自己の学習スタイルや各種ストラテジーを有効に役立てている学習者との接触の機会もしばしばある。これまでの学習経験を振り返るために帰国一ヶ月前に行われる本面接調査は、「自分の学習を正しく位置づける。自分の学習をきちんと評価する」という働きを持っている。残された一ヶ月の留学期間並びに帰国後の長期間にわたって「自分の学習を順序立て、計画する」ことが望まれる。

6. 上達するとはどういう意味か

学習者の日本語能力を客観的に測定する方法はさまざまあり、各教育機関独自のものもある。公の認定機関が実施するものもある。それぞれの測定には異なった目的や意義があることは言うまでもないが、学習者本人によって行われる自己評価の実態はまだ明らかになっていないとも言えない。教室活動のためには目標設定及び目標達成の成否に関する評価もなされているが、教室外のどのような場所でどのように学んでいるか、どのように能力が発揮されているかに関しては明らかになっていないのが現状である。学習者をとりまく学習環境に関する研究は多々見られるようになったが、どこまで客観性や信頼性が保てるかという点には大きな課題が残されている。本調査では日本語上達に関する主観的評価曲線を書くことを

学習者に求めているが、「上達」とは何を意味しているのだろうか。面接者自身が明確に定義づけられなければ、データを得る上で問題が生じるので、もっと明確化することが求められるだろう。ある学習者は「留学期間中に聞き取り力が伸びなかった。漢字力は飛躍的に伸びたけど」と語る。また、別の学習者は「聞くことと読むことは上達したけど、話すことが全然伸びなかった」と述べる。基本的な学習がまだ必要とされている時期に、このような能力の不均衡があれば本当の上達とは言えないだろう。どんな時に上達感を持つかとの問いに対して次のような回答が寄せられている。

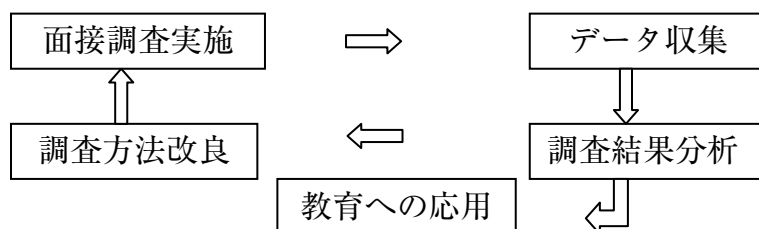
- ① 楽に授業についていけるようになった。
- ② クイズやテストや発表などで満足のいく結果が得られた。
- ③ 日本語を使ってホストファミリーと良い関係が築ける。
- ④ 急に日本人の話がよく聞こえるようになった。
- ⑤ 日本語を使って話すことが心地よく感じる。
- ⑥ 新しい親友や恋人ができて日本語を使う機会が増えた。
- ⑦ 両親や知人が日本を訪ねた時に旅行に案内できて自信がついた。
- ⑧ 自分が作った便利な表現メモを利用したらうまく会話ができた。

①②のように良い成績を維持することに連結するような教室内活動での出来映えに根拠を持つものと、③～⑧のような教室外場面での社会文化的能力を含むコミュニケーション能力が発揮できるかどうかによるものから成っており、第二言語の上達とは何を意味しているかの一端を示している。本学では日本語能力試験、留学試験、OPIなどの外部認定試験を受験する機会がない者がほとんどなので、試験合格という具体的目標を持たず、可否という客観的基準を持っていないが、大半の学習者にとってコミュニケーション能力の獲得が最大の関心事であることが明らかになっている。

藤原（2003）では「ヨーロッパにおける言語運用能力評価の共通フレームワーク」が紹介されており、詳細な能力記述例が見られる。例として「eメールで招待客に自宅への来方を手短かに説明することができる」等が挙げられており興味深い。これらの記述を利用して「上達」を具体的にとらえることも可能だろう。有用なデータを得るためには誤解を生むことのない適切な問いを多くすべきであろう。3名の面接者によって得られた結果をなるべく等質化し比較しやすくして信頼性を高めるためにも、「上達」の意味を限定することが大切だ。そのために上記のような能力に関する記述に対してアンケート形式で問うという方法でデータを収集することも興味深い。しかし、面接結果は面接者と被面接者との双方の協働作業の結果であるという観点からすれば、その良さを生かすためにはオープン形式の部分を残すことも必要ではないかと考えている。学習者自身から自己能力に関する詳細な自己分析データを得ることの方により多くの関心を抱いているからである。質の高いデータを集めるために、現在実施している半構造化インタビューの方式で調査を継続したい。

7. おわりに

面接調査によって得られる結果はその年度によって一定の特色を示している。少人数の留学生グループであるためにグループ内でのお互いの影響力が大きいからであろう。これまでに調査結果として表れてきたものは調査目標のうちのほんの一部でしかない。本調査によって得られた結果はその学習者のみが持つ一回きりの体験についての語りではあるが、共通するデータが今後の調査においても見つかることが予想される。各年度の学習者の個別性要因やグループダイナミックス的要因のために、調査結果は年度によって異なる特色を示すが、後期に生じる問題点はどの年度にも共通している。今後も、調査手法に更に改良を加えて実施時期のタイミングを考慮に入れながら調査を継続していきたい。面接を受ける学習者は約一年間の教室内外における自己の学習体験や学習行動に対する振り返りという作業を行うことによって、自己評価にかかわるメタ認知ストラテジーを喚起されるであろうし、今後の学習継続への刺激や動機付けとしても役に立つであろう。この面接は目標言語を用いるコミュニケーション活動の一つとしての意義もあり、本稿冒頭にも述べたように、個別指導の一環としての意義もある。学習者に対して振り返りの作業を課すということは即ち教師自身も自己の教育実践に対する振り返りや内省を求められることになり、コースシラバスや評価方法に関しての新たな視野や展望を持つことが期待されるだろう。秋学期（留学期前期）には基本的な教室活動に重点を置くことが望まれるが、春学期（留学期後期）には教室外との接触の幅を広げたり深めたりする努力を促すと共にシラバスや評価方法にも変化をつけることが大切である。学習者がいかに教室外の世界とのつながりを持っているかに常に深い関心を寄せつつ、教室内活動を充実させると共に教室内外との融合をはかることが今後の課題として残されている。教師役割が拡大してとらえられるようになって久しいが、教師は教室内外での授業を担当する役割ばかりでなく、学習者にとって望ましい環境作りに配慮するファシリテーターとしての役割及び学習上の悩みに耳を傾けられるカウンセラーとしての役割を果たすことが求められている。本調査によって明らかになった知見を今後の学習者支援のために応用することを望んでいる。この調査研究によって示唆されたことは翌年度のコースに活用されているが、次のようなプロセスを通じて教育現場に応用すべきヒントを蓄積し、カリキュラムを改良して斬新なプログラムを提供するための方策を発見していきたい。



注

1) 学習者グループの特徴

期間と学習時間：9月～翌年5月まで（秋学期150時間と春学期150時間）

月曜日～金曜日 毎日午前中2～3時間 週に11～12時間の日本語学習

学習歴など：来日前の学習歴は約1～3年 母語は主として英語

コースレベル：初級～上級 4レベル

目的：出身大学で日本語や日本文化の単位を認定される

2) 本稿は面接者3名で実施した調査結果をまとめて作成したものである。2005年8月にカナダ日本語教育振興会大会における口頭発表—富阪容子・森川結花・永田雅子「留学生自身が語る日本語上達の秘訣—日本語上達に関する自己評価調査の分析—」をもとにして、翌年度の調査結果を付け加えて筆者がまとめたものである。

3) 村岡（2002）では半構造化インタビューについて、次のようにまとめられている。

「現時点からふりかえて過去の出来事や行為についての回想をしてもらったり、過去の時点に戻ってその時の意識を内省し、報告してもらうことになる（cf. Gass and Mackey 2000）」

4) 1～5型に当てはまらないタイプを「その他」に入れた。たとえば

- ・技能別に曲線が描かれ、それぞれが別の型に属していると見なされる場合。
- ・全期間を通して横ばい線を描いた者や真剣に自己分析に取り組まなかった者

5) Kamata（2006）では留学生アイランド問題として次のような問題点が指摘されている。

- ・ Separation from Japanese Student Community
- ・ Use of English among Ryugakusei
- ・ Solidarity among Ryugakusei
- ・ Formation of American Branch Schools in Japan

6) Kawamura（2006）では留学生が属するドメインについて次のように定義つけられている。

A web of social networks that is characterized by defined sets of objectives and expected behavioral patterns arising from those objectives and the surrounding social conventions.

Example of domains：(Living arrangement, Co-curricular activities, Community activities, Work place, Foreigners' group)

参考文献

- 国立国語研究所編（2006）「日本語教育の新たな文脈—学習環境，接触場面，コミュニケーションの多様性—」アルク
- 白井恭弘（2004）「外国語学習に成功する人，しない人—第二言語習得論への招待—」岩波書店
- ゾルタン・ドルニエイ（2005）「動機づけを高める英語指導ストラテジー35」大修館書店
- 大学英語教育学会学習ストラテジー研究会編著（2005）「言語学習と学習ストラテジー—自律学習に向けた応用言語学からのアプローチ—」リーベル出版
- 津田塾大学言語文化研究所，言語学習の個性研究グループ編（2006）「ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—第二言語学習と個性—」春風社
- 富阪容子（2003）「日本語学習支援システムとしての課外個別指導」『言語と文化』第7号 甲南大学国際言語文化センター
- 藤原三枝子（2003）「ヨーロッパにおける言語運用能力評価の共通フレームワーク」『言語と文化』第7号

甲南大学国際言語文化センター

細川英雄 (2005) 「実践研究とは何か」 日本語教育126号 日本語教育学会

J. マルカム・S. ノールズ (2005) 「自己主導型学習ガイドーともに創る学習のすすめー」 明石書店

宮崎里司編著 (2006) 「早稲田から世界へ発信 新時代の日本語教育をめざして」 明治書院

村岡英裕 (2002) 「質問調査：インタビューとアンケート」 『言語研究の方法』 くろしお出版

やまだようこ編 (1997) 「現場心理学の発想」 新曜社

好井裕明 (2006) 「あたりまえを疑う社会学」 光文社新書

レベッカ L. オックスフォード, 宍戸通庸ほか訳 (1994) 「言語学習ストラテジー」 凡人社

Hiroaki Kawamura & Mari Noda (2006) "Where do you learn to be in Japan and How?"

International Conference on Japanese Language Education

Osamu Kamata (2006) "Present State of Study Abroad Programs for American Students in Japan"

International Conference on Japanese Language Education

Rebecca L. Oxford. (1990) "Language Learning Strategies- What Every Teacher Should Know-" Heine & Heine
Publishers

S. B. メリアム, 堀薫夫ほか訳 (2004) 「質的調査法入門」 ミネルヴァ書房